

夜明け前

現在、己が在ることの口惜しさ、苦さ
この椅子に深く身を沈めていることの嫌悪
真夏の日が昇るまでのなまぬるい薄闇
それら、外界へ開かれたわずかな隙間から
やっとの思いで、私の感覚がわずかに覗けるものに
僕は激しく疲れを増幅される

生というものの末期
醗えた化学反応のような体臭に吐き気がする
枯れ尽きてもかぐわしい
そのような香草ではいられぬものか
動物という何とも淫らな生物なんかではなく

じりじりと暑熱の気配が近付いてくる

それとも、生というものに無感覚な
それでいて、生のもたらす美のみを吸い込む
そのような五感のみを残して滅び、朽ち果てたい
おお、破壊の王となりうる灼熱の太陽よ
僕を焼き尽くせ

血生臭い、むせかえるような生などもう要らない
欲望に煽られ、そしてその器を満たすだけの生など
ああ、夏の太陽よ、お前にくれてやる

(2005.7.18)